中・四国アメリカ学会

第44回年次大会プログラム

2016年11月26日（土）広島大学東千田キャンパス

**理事会**（11:30～12:30）：ミーティングルーム3-1　　司会　中野博文（北九州市立大学）

**受付開始**（12:00～）： M303講義室

**開会の辞**（12:45～）　　　　　　 　　　　　　 　中野博文（北九州市立大学） 　　**研究発表**（12:50～14:50）

・舞台上の革命——*Hamilton*の歴史表象とその詩学（12:50～13:30）

発表者：森 瑞樹（広島経済大学）、司会：上田 みどり（広島経済大学）

・2016年アメリカ大統領選挙におけるイスラエル・ファクター（13:30～14:10）

発表者：船津 靖（広島修道大学）、司会：塩田 弘（広島修道大学）

・愛を請う人——―The Passages of H.M.におけるHerman Melville像（14:10～14:50）

発表者：髙橋 愛（徳山工業高等専門学校、司会：辻 祥子（松山大学）

**コーヒー・ブレイク**（14:50～15:00）

**シンポジウム**（15:00～17:00）

反権威主義とアメリカ―民主主義、腐敗、反体制

モデレーター　 横山 良（神戸大学名誉教授）

・アメリカ建国期における共和政の危機と言論・出版の自由

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 肥後本 芳男（同志社大学）

・「ドアの反乱」にみるアメリカの反権威主義――人民主権論の検討を中心に

小原　豊志（東北大学）

* Exposing Corruption and Resisting Authority: Climate Change and the Fiction of Chang-rae Lee and Paolo Bacigalupi

Michael Gorman（広島市立大学）

**総会**（17:00～17:15）　　　　　　　　　　　　　　　司会　中野博文（北九州市立大学）

**閉会の辞**（17:15～17:20）　　　　　　　　　　　　　副会長　肥後本芳男（同志社大学）

**懇親会**（18:00～20:00）：ホテル メルパルク広島（〒730-0011広島県広島市中区基町6-36）

＊なお、中・四国アメリカ学会第44回年次大会は、財団法人アメリカ研究振興会の助成を受けて開催しております。

研究発表

舞台上の革命——*Hamilton*の歴史表象とその詩学

森 瑞樹（広島経済大学）

ポストモダン理論の隆盛により人種やジェンダー等の大きな物語が疑問に付され、同時にそれらが脱構築されるべき対象として認識されるようになって久しく、これらのような主題は文学、及び文学批評という俎上においても盛んに追求され続けている。

しかしながら、文学でありながらも視覚に頼らざるを得ない芸術でもある演劇において、舞台上で演じる役者個々人のアイデンティティ、つまり人種やジェンダーといった表層のシニフィアンが演劇としての完成形を求めるうえでの大きな足枷となっていることは論を俟たない。つまり、例えば人種横断的、また同時に性差横断的な戯曲を劇作家が志向したとしても、それが舞台上で可視化された瞬間に崩壊したはずの大きな物語が甦り、亡霊のように役者の身体に取り憑いてしまう。このアイロニーを戦略的に利用し、最大限の異化効果を狙った戯曲があることも事実ではあるものの、そこにおいてはやはり大きな物語に向けられた懐疑的なまなざしを表象することに焦点が当てられており、ポストモダンのその後を志向するまでには至っていない。

2016年度のトニー賞、ピューリツァー賞、さらにはグラミー賞でも賞を受け、その注目度の高さを見せつけたLin-Manuel Mirandaのミュージカル作品である*Hamilton: the Revolution* (2015)は、その名を冠したタイトルで自明のように、アメリカ合衆国の建国の父のひとりであるアレキサンダー・ハミルトンの生涯をドラマタイズした作品である。この戯曲においては、歴史的アイコンとなっている人物をアフリカ系アメリカ人の役者が演じるよう指定されていることが多く、例えばジョージ・ワシントンやトーマス・ジェファーソンといった人物でさえその例外ではない。さらにはこれと呼応するかのように、ヒップホップの楽曲が劇中を通して使用され、あからさまに黒人性が前景化される。このような*Hamilton*ではあるものの、その文脈は極めて単純に歴史的事象をなぞり、それを纏めたものにすぎない。しかし、この作品の表象戦略をつぶさに分析することによって、単なるポストモダン的異化効果以上のものが浮上してくる可能性がある。

そこで本発表では、*Hamilton*においてアンテベラム期の歴史的文脈をアフリカ系アメリカ人のモチーフをとおして語ること、つまり建国期の歴史的文脈と劇的効果とを接続することの意義を探ることから始めてゆく。そうすることで、戯曲の執筆段階で作家にアプリオリに取り憑く意識をどのように祓うのか、という問題へも敷衍してゆくだろう。それは言わば、既に慣習的になりつつある異化効果という概念自体を改めて捉えなおし、それが孕むアイロニーも含めてその概念を脱構築するMirandaの詩学を浮き彫りにすることでもある。そしてさらには国家的・個人的アイデンティティと歴史記述との関係についても新たな視座が提供できるかもしれない。

2016年アメリカ大統領選挙におけるイスラエル・ファクター

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　船津靖（広島修道大学）

中東パレスチナのユダヤ人国家イスラエルは、アメリカ政治において特異な重要性をもっている。2016年の大統領選挙でも民主・共和２大政党はイスラエル重視をそろって強調し、中東におけるイスラエルの軍事的優位維持への継続的な支援を確約した。

民主党は選挙綱領に、アラブ人のパレスチナ国家樹立による占領・紛争の終結を目指す「２国家和平案」を明記した。共和党はイスラエル（シオニズム）支持をアメリカニズムに重ね、同党の候補者らは「アメリカ大使館をテルアビブからユダヤ人の永遠の都エルサレムへ」と競い合って主張した。

アメリカのユダヤ系市民は全米人口の約２％にすぎない。大統領選候補者にとってイスラエルへの支持を表明することが、なぜそれほど重要なのだろうか。それは強力なIsrael Lobbyの存在が大きい。ロビーの力の背景には、ユダヤ系市民の社会的地位や政治意識の高さ、金融・情報の中心ニューヨークなどへの集住、両国間の移民・二重国籍者の活動、シオニズムを神の栄光へのプロセスとみなすキリスト教福音派の存在、そしてシェルドン・アデルソンはじめ突出したメガ・ドナーの資金力などがある。

オバマ政権は、共和党系ロビーと強く結びつくネタニヤフ政権とイラン核合意やユダヤ人入植地をめぐり対立した。ただユダヤ教「改革派」が多数を占めるユダヤ系アメリカ人の票は、伝統的に民主党支持が７－８割とされる上、ネタニヤフ政権を批判する進歩的な若者中心の和平派ユダヤ系組織の影響力が広がっている。ヒラリー・クリントン候補は、パレスチナ恒久地位交渉の合意を悲願とした夫の前大統領とともに、イスラエルの和平派野党と特に関係が深い。娘チェルシーの夫は、ドナルド・トランプ候補の娘イヴァンカの夫と同様にユダヤ系である。

トランプ候補はこの娘婿を軸に、ユダヤ系や福音派の票と資金の獲得に力を入れた。しかしユダヤ系からの支持は低所得層に多い「正統派」の一部にとどまり、アデルソンの巨額資金も上下院選に多く流れている。福音派にはトランプ候補の世俗性と同盟関与への消極性を問題視する見方が強い。

アメリカのユダヤ系市民は、ヨーロッパやロシアでほど苛烈でなかったとは言え、かつて反ユダヤ主義による露骨な差別を受けた。White nationalismともみられる「トランプ現象」に警戒感がある。親ナチスのリンドバーグがルーズベルトを破って大統領になる筋立てのフィリップ・ロスの空想歴史小説『プロット・アゲンスト・アメリカ』は、成功した現代のユダヤ系市民の心にも、社会の多数派から突然スケープゴートにされる恐怖感が潜んでいることを示している。

愛を請う人——The Passages of H.M.におけるHerman Melville像

髙橋 愛（徳山工業高等専門学校）

　Herman Melvilleは、その作品が広く読まれ続けているアメリカ人作家の1人である。1920年代に「復興」を果たしてから現在に至るまで、Melvilleその人についても研究が進められているが、研究者のあいだで見解が分かれている点がいくつかある。例えば、妻Elizabethとの関係や彼のセクシュアリティである。

　Jay PariniのThe Passages of H.M. (2011)は、”Lizzie”ことElizabethと三人称の語り手が作家の生涯を交互に語るという形式をとる小説である。本作品において、ElizabethはMelvilleとの出会い、苦難に満ちた結婚生活、そして彼の死を自らの視点から語り、語り手は、Melvilleが思いを寄せた人物との関係に焦点を当てながら、作家・詩人として彼がたどった軌跡を示してみせる。この作品は、フィクションではあるが、Herman Melvilleをめぐる上記の問題に鋭く切り込んでいる。特にセクシュアリティに関しては、同性の友人に対する報われることのない愛に身を焦がす作家の姿が丹念に描かれている。

　本発表では、Pariniの作品で描かれるメルヴィルのセクシュアリティに注目する。特にMelvilleの愛の対象として明示される２人の男、すなわち、捕鯨船ルーシー・アン号の司厨長で、第2長編Omoo (1847)で語り手の青年と行動をともにすることとなる医師Long GhostのモデルとされるJohn Troyと、Moby-Dick (1851)執筆時に親交を深めた先輩作家Nathaniel Hawthorneとの関係を取り上げ、彼らとの関係とその破綻がどのように描かれているのかを分析する。そのうえで、創作にあたっては先行研究での議論も依拠したというPariniが、Melvilleのセクシュアリティをどのようにとらえているのかについて論じていく。さらに、作家についてのフィクションが、作家研究に対してどのような可能性を持つのかという点についても考察したい。

シンポジウム

反権威主義とアメリカ―民主主義、腐敗、反体制

趣旨説明

　2001年9月11日の同時多発テロの衝撃とそれに続くイラク戦争、米軍のアフガニスタン派兵、それに反発した「イスラム国」勢力の急激な伸張とテロの世界的連鎖は、国際社会の安寧をかく乱し、冷戦後の多極化した国際秩序を大きく揺さぶっている。くわえて、2008年のリーマン・ショックは、ITに支えられたニューエコノミーと称される金融資本主義に潜む危険と脆弱さを浮き彫りにし、自由市場と競争原理を標榜する新保守主義的な経済政策は、日米双方の社会において深刻な社会格差を生んでいる。

このような状況下で第二次世界大戦終結後71年目にあたる2016年は、アメリカ大統領選挙の年でもある。7月下旬に開催された共和党の全国大会は分裂の兆しを含みながらもドナルド・トランプを大統領候補に指名し、他方民主党は女性初の大統領候補者としてヒラリー・クリントンを選出した。しかしながら、両候補者ともアメリカ市民の高い支持率を得られず、「不人気候補」二人の奇妙な一騎打ちの様相を示している。

8年前に「チェンジ」への強い期待に沸いたオバマ政権発足当初の熱狂的な支持は急速に冷め、国内外での諸問題を積み残したままでいまや一般のアメリカ人のあいだには失望感さえ漂っている。今年の大統領候補者指名レースにおけるドナルド・トランプの予想外の躍進は、主に白人中産層と低所得者層のあいだに近年蓄積されてきた政治への不満や社会不安に支えられているのである。

メディアを巧みに操るトランプの挑発的で反体制的な演説、極端な移民排斥と排外主義は、共和党を事実上引き裂き、穏健で良識派の共和党員を傍流へ押しやる一方で、既存の政党に背を向けた有権者層の多くがトランプ支持に回っている。外の世界に目を転じれば、イギリスのＥＵ離脱の影響、「核なき世界」に向けて国際社会の合意を得ることの難しさ、国内の産業利害の前に地球温暖化や環境保全対策への国際協調が骨抜きにされている状況など、厳しい国際環境のなかでアメリカの二大政党制や民主主義は、いま歴史的な岐路に立たされていると言ってよい。

21世紀にアメリカはどこに向かうのか。本シンポジウムでは、アメリカ合衆国における反権力主義の系譜や民主主義をめぐる論争、ロビイストを中心とした利権政治の弊害を歴史的なコンテクストの中に位置づけて再考したい。大統領候補予備選で全米を席巻した「トランプ現象」や今日の広範な政党不信・体制批判など、アメリカの「いま」をよりよく理解するための有益な意見交換の場になることを期待している。

アメリカ建国期における共和政の危機と言論・出版の自由

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 肥後本 芳男（同志社大学）

　高名な医師ベンジャミン・ラッシュは、1786年1月、イギリス人科学者で急進思想家リチャード・プライスに宛てた書簡の中で、「アメリカの独立戦争は終わりましたが、偉大なドラマの第一幕が降りたにすぎません。新たな形態の政府を確立し完全なものにする課題が残されています」と述べた。翌年、連邦規約体制を見直すために各地のアメリカの指導者はフィラデルフィアに招集されたが、3か月以上も費やした白熱した会議はまったく新しい連邦憲法草案の作成に帰結した。この連邦憲法案の批准をめぐる地方レヴェルの議論は大きな諸州では拮抗し、建国期の新しい政治文化を醸成する契機となった。

　建国間もない1790年代のアメリカは深刻な「自由の危機」に直面した。ラッシュが懸念したように新共和国の指導者は君主制に決別し新たな政体を創設することには合意があったものの、真に持続可能な共和政体のあり様については政治指導者の間で意見対立が浮き彫りになった。フランス革命の急進化やカリブ海域での黒人反乱、英仏戦争の勃発という緊迫した国際状況下で、彼らは一般の市民をも巻き込み、当時急速に爆発的に増大した新聞やパンフレットなどのメディア媒体を通して激しい政治論争を繰り広げた。

1794年のジェイ条約締結をめぐってアメリカ国内で吹き荒れた反政府批判を封じ込めるために1798年アダムズ政権は、アメリカ史上もっとも悪名高い連邦法の一つとして今日よく知られている「外人法・扇動法」の導入に舵を切った。この事態に際して、憲法批准時の反フェデラリスト派とその流れを汲むリパブリカン派は、フェデラリスト政権を攻撃するゲリラ的な論戦を挑み、結果的に新共和国における民主主義的かつ多元的な言論空間を生み出すことに少なからぬ貢献を果たした。

本報告では、まず「外人法・扇動法」がいかなる状況下で導入されることになったのか、まず「長い90年代」の国内外の要因を踏まえて考察する。次に、印刷文化の視点からフェデラリスト政権を支える政治指導者たちにとってなぜ「外人法・扇動法」という強硬な手段に訴えなければならなかったのかを検討する。最後に、リパブリカン派の批判の論理を分析することでアメリカ史上最初の「自由の危機」が意味するものについて考えてみたい。

「ドアの反乱」にみるアメリカの反権威主義

―人民主権論の検討を中心に―

小原 豊志（東北大学）

1840年代初頭にニューイングランドに位置する合衆国最小の州、ロードアイランド州においてある政治闘争が発生した。いわゆる「ドアの反乱」（Dorr Rebbellion,1842年）である。この闘争は男子普通選挙制の導入を主眼とする州憲法制定運動として始まった。それというのも、建国後も同州は州憲法を制定することなく、統治の根拠を植民地期の1663年に下付された勅許状に置き、そのもとで選挙権を土地所有者に限定し続けていたからである。

こうした状況に対し、独自の人民主権論のもとに立ち上がったのが新進気鋭の弁護士、トマス・W・ドアであった。ドアを指導者とする「民主化」勢力は州政府が依然として選挙権の拡大に否定的であることを見て取るや、1841年に白人男子普通選挙制の導入を盛り込んだ「人民憲法」People’s Constitutionを制定し、翌年にはドアを州知事とする新たな州政府を設立した。ここにロードアイランド州は二重政府状態に陥り、内戦の勃発さえ危惧されたのであったが、結局のところ、既存の政府側が発した戒厳令のもとで、この「反乱」は完全に制圧されることになった。

以上のように、この「反乱」は建国後半世紀を経過しても統治の根拠を植民地期の勅許状に置き続けた特異な州で起こった州統治構造の刷新運動といえる。ただし、その特異性を理由にしてこの「反乱」を看過できないのは、鎮圧後この出来事が連邦の場で「ロードアイランド問題」Rhode Island Questionと名付けられ、「反乱」の正統性をめぐって白熱した議論が交わされたからである。すなわち、この「反乱」は憲法とは誰が、いつ、いかなる形で制定しうるのかという問題を、すなわち、独立宣言で謳う人民主権の本質（＝主権者である人民の範囲とその権能）を同時代人に問うものであったのである。

アンテベラム期における人民主権論の変遷を扱ったクリスチャン・フリッツによれば、アメリカ立憲主義の基礎をなす人民主権とは本来、人民が自由に政府を改廃し、方法にとらわれず自由に憲法を作成・修正する権限を有することを意味していたという(Fritz, Christian G. *American Sovereigns: The People and America’s Constitutional Tradition Before the Civil War*, 2008)。建国期にこのような人民主権論が合意されていたとするなら、そのほぼ半世紀後に発生した「反乱」はアメリカ立憲主義のなかにどう位置づけられるのであろうか。

このような問題関心から、本報告では建国以降の人民主権論の展開を視野にいれつつ「反乱」を再検討することにより、ドア勢力の唱えた人民主権論をアメリカ立憲主義の歴史に位置付けてみたい。

Exposing Corruption and Resisting Authority: Climate Change and the Fiction of Chang-rae Lee and Paolo Bacigalupi

Michael Gorman（Hiroshima City University）

"[T]here are disaster areas declared across the country right now, but the biggest one is in DC." These words were written in 2012 by climate change activist and Middlebury College professor, Bill McKibben.1 In them, McKibben is criticizing the federal government of the United States for failing to enact legislation to combat global warming, a human-driven environmental catastrophe.

McKibben recognizes that the U.S. Congress is ignoring global warming because of political corruption and corporate oligarchy. The American government is prevented from acting on this pressing global issue by a legal form of political corruption known as lobbying that allows the fossil fuel industry to help elect politicians who deny climate science and refuse to restrain the devastating activities of the oil, gas, and coal companies.

Several contemporary writers have picked up on the themes highlighted by the writing and statements of Bill McKibben. This paper will discuss the ways two American novelists—Chang-rae Lee and Paolo Bacigalupi—respond to the refusal of the United States government to seriously address climate change. Beyond exploring the bleak futures these authors envision, the paper will consider the forms of resistance and satire contained in Bacigalupi's The Drowned Cities (2012) and Lee's On Such a Full Sea (2014).

---------------------

1 McKibben, Bill. "While Colorado Burns, Washington Fiddles." The Guardian 29 June 2012. theguardian.com. Web. https://www.theguardian.com/commentisfree/2012/ jun/29/while-colorado-burns-washington-fiddles